



平成26年2月28日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第43回）及び 首都直下地震モデル検討会（第25回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成25年9月5日（木） 13:00～15:00

場所：中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者：今村委員、入倉委員、岡村委員、金田委員、佐竹委員、古村委員の南海トラフ巨大地震モデル検討会の各委員

今村委員、岡村委員、佐竹委員、平田委員、古村委員の首都直下地震モデル検討会の各委員

2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法などについて事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

【首都直下地震に関する検討】

○ 鳥取県西部地震は地震が起こってから調べても断層ははっきりしなかったが、岩手・宮城内陸地震は、地震前はわかっていないが、起こった後は断層が確認されている点で違うのではないかと。岩手・宮城内陸地震と同じものが関東平野にあったときには、段丘が広く出ているところだから、割と見えやすいと考えられる。ただ、利根川沿いの低地等は地下に埋もれている可能性があるかもしれない。

○ 最大クラスのSMGAの設定は、元禄関東・大正関東の震源域の中に配置するのでよいのではないかと。巨大な背景領域は地震動には余り効かないが、スケーリングで大きくすべるから地殻変動とか津波の発生に大きく作用する。余り地震動に効かないのにこの大きな領域を残しておく必要はないのではないかと。

○ 震源域でSMGAの配置の仕方については、論理的に考えるべきで、過去のこれまでの研究成果を反映し、過去繰り返し動いたところを考慮するというというのはどうか。

○ 超大すべり域を震源域の東側に置くケースは、範囲が大きく、モーメントも大きくなる。我々の持っている超大すべり域のイメージはごくごく海溝沿いなのではないかと。

○ すべり域の設定において防災を考えるとときに重要なのは、東京湾にどれだけ大きい津波が入るかを考えるべきではないかと。

【長周期地震動に関する検討】

- 破壊伝播速度の揺らぎを与えることとし、揺らぎの与え方についてはパラメータスタディーを行い平均的な乱数を複数選んで平均化してはどうか。
- 計算する上で震源の揺らぎを与えるのは、自然界と同様に揺らぎを入れるということと、不自然なディレクティビティーパルスを消すため揺らぎの幅もこれらの観点から適切な数をまず決めるべきではないか。
- 破壊の伝播速度は長周期の振幅に影響を与えるが、すべり角は余り効かないのでケーススタディー対象外とし本当に必要なところを最初に押さえてケース数を減らしてはどうか。
- 周期3秒程度で振幅の再現性が改善される理由は、少し明確にしておいたほうがよいのではないか

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199